

特別支援学級におけるキャリア教育に関する一考察

－地域の特色を生かした日々の教育活動から－

A Consideration on Career Education in Special Needs Class

－Based on daily education activities taking advantage of regional characteristic－

岡野 由美子

Yumiko OKANO

要旨 (Abstract)

本稿では、小学校の特別支援学級に在籍する知的障害のある児童に対する、キャリア教育の実践について考察する。特別支援学級に在籍する児童は、日々の学習において、交流および共同学習として通常の学級で学習をし、集団生活を体験したり、多様な意見を聞いたりしながら学びを深めたり広げたりしている。そして、障害の程度や状況に応じ、特別支援学級で個別に学習をし、教科学習だけでは身につけることの難しい、自立に向けた必要な力をつける自立活動を中心とした学習をしている。また、学校行事や学習活動では、校内だけではなく地域と連携し、様々な活動が展開されている。そのような学習を通して、キャリア発達を促すことが求められている。特別支援学級において、地域の特色を生かしたキャリア教育にどのように取り組めば良いか、具体的指導事例を挙げ、論じることとする。

キーワード：特別支援教育、キャリア教育、特別支援学級

I. はじめに

特別支援学級に在籍する児童生徒の数は、年々増加している。文部科学省の「特別支援教育資料（平成29年度）」調査によると、小学校の特別支援学級在籍児童数は、167,269人であり、中学校の特別支援学級在籍生徒数は、68,218人である。また、小学校の特別支援学級数は、41,864学級であり、中学校の特別支援学級数は、18,326学級である。⁽¹⁾平成19年度の同省による同調査結果では、小学校の特別支援学級在籍児童数は、78,856人で、中学校の特別支援学級在籍生徒数は34,521人であった。また、小学校の特別支援学級数は、26,297学級で、中学校の特別支援学級数は11,644学級であった。⁽²⁾つまり、10年前と比べると、小学校の特別支援学級在籍児童数は、約2.1倍、中学校の特別支援学級在籍生徒数は、約2.0倍に増加しており、同様に、小学校の特別支援学級数は約1.6倍、中学校の特別支援学級数も約1.6倍に増加しているということになる。

年々、小学校、中学校の在籍児童生徒数全体が減少傾向にある中で、特別支援学級の在籍者数は増加の一途を辿っているのである。

これは様々な理由が考えられるのであろうが、特殊教育が特別支援教育に変遷し、発達障害の概念が普及したことや、学校現場における多様な学びの場の充実を図った事によるものでもあると考えられる。

そして、この多様な学びの場を利用して、将来の自立と社会参加に向けた一人一人に応じた教育のあり方が今、問われているとも筆者は考える。

さて、多様な学びの場には、通級による指導も含まれている。通常の学級に在籍しながら、通級による指導を受ける児童生徒もおり、その時の児童生徒の能力を最大限に発揮させつつ、児童生徒のその時の教育的ニーズに最も応えることのできる場で学ぶインクルーシブ教育システムの構築が進む中で、将来を見据えた指導がなされてきている。このように、様々な体制の整備が進んできている。

さらに、学習指導要領の改訂が行われ、小学校、中学校でも多様な教育的ニーズに応えること、そして教科の横断的な指導ができるようなカリキュラム・マネジメントを行い、縦横の連携の充実を図ることが示された。小学校学習指導要領総則には、「各学校においては、児童や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的または物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと（以下、「カリキュラム・マネジメント」という。）に努めるものとする。」⁽³⁾と示されている。

このように、将来を見据えた指導が大切であり、児童生徒が将来の希望をもち、それに向かって主体的に学ぶための仕組みを作ることが大切であるという観点から、キャリア教育を推進することが打ち出された。

では、特別支援教育とキャリア教育とは、どのように関連があり、どう推進していくことが求められるのだろうか。

Ⅱ. キャリア教育と特別支援教育

(1) キャリア教育の変遷

平成11年の中央教育審議会答申「初等中等教育と高等学校との接続の改善について」の中で、「キャリア教育」という用語が初めて登場した。その背景には、社会環境の変化や環境の変化などの、子どもたちへの影響がある。急激な変化は、子どもたちに良い影響を与えたばかりではなく、人間関係の築きにくさや自己肯定感の低下、将来への不安や希望のなさなどを抱える子どもが増え、将来に希望を持ってなくなるという影響も与え、様々な困難に直面しているといった状況が浮き彫りになってきた。これらのことから、子どもたちが将来に希望を持ち、様々な変化や多様化する社会に対応していく力をつけるためには、日々の教育活動を見直し、家庭・地域とも連携しながら、柔軟にたくましく自立していく力をつけていくことが大切である。このような社会や環境の流れにより、学校教育に求められる姿も見直される中で、キャリア教育の必要性が議論されるようになったのである。

そして、平成23年の中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」において、キャリア教育は、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義された。当初、キャリア教育は「新しい教育活動を指すものではない」としてきたことにより、従来の教育のままでよいと解釈されたり、「体験活動が重要」という側面のみを捉えて、職場体験活動の実施を持ってキャリア教育をおこなったものとみなしたりする傾向が指摘されるなど、一人一人の教員の受け止め方や実践の内容・水準には、バラツキのあることも課題として伺えた。「キャリア」という言葉の印象から、単なる「職業教育」という誤解が生じたり、勤労観・職業観の育成のみに偏ったりした教育がなされつつあった。それらの課題を経て、「キャリア発達」を「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」とし、キャリア発達に関わる諸能力（例）として示された「4領域8能力」から、

「基礎的・汎用的能力」へ転換し、推進することが求められるようになった。⁽⁵⁾

このように、「キャリア教育」という用語が用いられてからも、キャリア教育とは何か、ということについては様々な議論がなされ、各教育現場の受け取り方や中核となる考え方について、様々に変遷してきているのである。

このような中、各学校においても、「キャリアノート」の活用や、先進校の実践に学び、実践が行われている。一人一人の生き方は異なり、人によって、何を大切にし、重きを置いて生きていくかは異なる。同様に、「勤労観・職業観」も異なって当然であり、児童生徒が社会に出るまでに、一人一人の考え方を形成していくことを支えることが大切であるとされている。自分は何が得意なのか、何を生きがいにするのか、というようなことを改めて考える機会はあまりないかもしれない。しかし、様々な教育活動の中で、キャリア教育の視点を取り入れた指導をすることで、児童生徒が土台となる考え方を持つことができるようになるのではないだろうか。

(2) キャリア発達の理解

文部科学省からは、学校現場の教員が理解し、取り組みやすくなるような取り組み事例や、キャリア教育の手引きを発行し、参考となる資料として示してきた。これまでに、学校種ごとに手引きを発行し、改訂をしつつ情報発信を続けている。

「小学校キャリア教育の手引き（改訂版）」（2011年5月）には、小学校段階におけるキャリア発達の特徴をあげ、その理解すべき視点を示している。一部を以下、表1に示す。⁽⁴⁾

表1 キャリア発達について理解しておくべき視点

- ・ 小学1年生では、入学以前の段階（幼稚園など）との連携を踏まえて小1プロブレムへの対応が重視され、小学6年生では小学校卒業後の段階である中学校との連携を踏まえて中1ギャップへの対応を考える必要がある。
- ・ 人は社会における事故の立場に応じた役割を果たし、自分らしい生き方を実現しながら生活する中でキャリアを形成する。キャリア発達を捉えるためには「社会における自己の立場」や発達段階において期待される役割を認識する必要がある。
- ・ 低学年では主に次の3点、①小学校生活に適應する、②身の回りの事象への関心を高める、③自分の好きなことを見つけて伸び伸びと活動する、が挙げられている。あくまでも主な発達課題としてとらえて参考にするとともに、児童や地域の実態に応じて各学校ごとに設定することが望ましい。
- ・ 中学年では主に次の2点、①友だちと協力して活動する中でかかわりを深める、②自分の持ち味を發揮し役割を自覚する、が挙げられている。自己に関する理解や自己の生活習慣にポイントを置いた低学年に対して、中学年では自己と他者や集団との関わりについて発達課題が中心となることに配慮する必要がある。
- ・ 高学年では主に次の3点、①自分の役割や責任を果たし役立つ喜びを体得する、②集団の中で自己を生かす、③社会と自己とのかかわりから自らの夢や希望をふくらませる、が挙げられている。小学校におい

てリーダーシップを発揮する存在となる高学年では、集団において役割や責任を果たすことが強調され、さらに社会とのかかわりを重視し、各自の進路に夢や希望を持たせる段階であることを認識する必要がある。

- ・ 担当する学年団のキャリア発達のみを視野に収めるのではなく、自分の属する学年団の前後の関係を理解することや、中学校の時期におけるキャリア発達との関連を捉えることなど、時系列的な関連性を理解し、系統的な指導を行うことができるようにすることが大切である。

(3) 特別支援教育とキャリア教育

一方で、特別支援学校では、自立し、社会参加できる生徒を育てるという観点で、自立活動や、各教科等を合わせた指導の中で将来を見据えた様々な指導が行われてきた。

高等部の生徒の卒業後の進路に関し、具体的な職業教育や進路指導を計画的に行い、生徒に合った進路を選択できるよう、実態を考慮しながら指導をしている。

就労支援コーディネーターを配置し、事業所での実習、企業等との連携、また技能検定などを学校で実施するなどして、生徒が目的意識を持った学習となるよう、取り組んできた。

特別支援学校高等部卒業生徒の就職率は、文部科学省の「教育支援資料（平成29年度）」によると、平成29年3月卒業生で、30.1%である。その他では、社会福祉施設等入所・通所者が62.2%と最も多く、大学等への進学者が1.9%、専修学校等の教育訓練機関等入学者が1.8%、その他が4.0%となっている。就職者の就職先を職業別に多いものを見ると、「サービス職業従事者」が1,458人で最も多く、次いで「運搬・清掃等従事者」が1,390人、「生産工程従事者の製造・加工従事者」が1,269人となっている。⁽⁵⁾

このように、特別支援学校の卒業生は、進学する者よりも就労に関する分野へ進む割合が高い。しかし、実際に就職をした生徒の割合は約3割にとどまっている。また、高等部で進路指導、職業指導は充実して行われてきているが、キャリア教育の観点について整理し、高等部だけにとどまらず、小学部からどのような視点で指導ができるか、といったことを考える必要が出てきている。

これこそ新たな教育の導入ではなく、これまで特別支援学校が取り組んできた内容をキャリア教育の視点で整理し直し、児童生徒のキャリア発達を考慮した計画を立て、実施するということである。

また、小学校・中学校における特別支援学級においても、同様のことが考えられる。特別支援学級の児童生徒は、同学年の通常の学級と交流及び共同学習が行われ、通常の学級の児童生徒の多様な考えに触れたり、集団の中で生活をしたりしながら、様々なことを体験的に学習ができる。このような特徴も生かし、障害のある児童生徒が将来どのような進路をとりたいか、どんな進路があるのかということを様々に知りつつ、自分にとって何がやれそうか、何をやりたいかを考え、目的に向かって主体的に学ぶことができると思われる。

以上のことを踏まえ、知的障害のある児童のキャリア教育に関する指導について、指導事例を挙げて考察する。

Ⅲ. 具体的指導事例 ～生活単元学習を通して～

(1) 対象児童について

知的障害および自閉スペクトラム障害のある2学年の児童である。特別支援学級に在籍している。教育過程にお

いては、知的障害のある児童に対する特別の教育課程を編成している。具体的には、各教科等の指導、自立活動、各教科等を合わせた指導、特別活動等を設定し、その中で生活単元学習の時間は週2時間を原則として設定している。交流学級での学習も教科や内容に応じて行なっており、その時には担任も交流学級に入り、指導・支援を行なっている。自立活動の時間を設定し、生活課題に応じた学習を行なっている。

教科学習は、繰り上がりのない計算や1年生で習う漢字の読み書きができる程度である。書いてあることを読み上げたり、物を数えたり、時計を読んだり是可以する。

就学前から、学校を見学したり教室や机を確認したり、入学式のリハーサルも行うなど、入学に向けての準備を丁寧に行なった。その成果か、学校生活には入学時から大きな混乱なく移行でき、欠席も少ない。周囲との関係性は悪くないが、自らコミュニケーションをとることが難しい。語彙も少なく、自分の思いを周囲に正確に伝えることが難しい。挨拶や返事など定型句的な言葉を発することは大きな声で進んでできる。

不器用さがあり、走る・跳ぶなどの粗大運動、文字を書くなどの微細運動ともに苦手である。握力、筋力は弱く、重い荷物を運ぶときなどは、交流学級の仲間の手助けが多い。

見通しにくい場面や行事などの時には緊張や不安が高まるため、事前指導や場面のリハーサル等が欠かせない。困った時などに自ら周囲に助けを呼ぶことが無い。周囲が気づいて支援するまで、黙って他のことをしたり人の様子を見たりして時間が過ぎてしまうことが多い。

将来は、挨拶ができることや、興味のあることは意欲的に取り組むという長所を生かすことができる分野への就労を家庭は望んでいる。

(2) 地域との協力体制

当該小学校は山間部に位置している小規模校で、周辺の住民は比較的高齢者が多く、地元に着した学校である。3世代同居家庭も多い。運動会やオープンスクールなどの学校行事には、一般の高齢者も多くの参加がある。また、学校行事以外でも、各学年での総合的な学習の時間をはじめとする様々な学習活動などにも地域の協力がある。ゲストティーチャー招致、社会福祉協議会等とのタイアップなどの行事も伝統的に行われており、地域の方と教員が顔を合わせ、協力しながら活動を行う機会が様々な学校である。

このように様々な協力を仰ぐことのできる地域人材が多い地域性を生かし、様々な体験活動や先人に学ぶ機会を設けることは、教員だけで教えるよりもより現実味があり、実際に見聞きできることの教育的効果も大きいと考えられる。

また、特別支援学級の在籍児童についても、登下校などを通して地域の方々がよく知っており、小さい頃から地域で育ててくださっているという関係性がある。

(3) 授業実践例

① 単元構成計画 ～キャリア教育に関する観点整理～

ア 単元名 「お店やさんに招待しよう」

- イ ねらい
- ・ お店の準備や計画を通じて、働くことの経験をし、仕事についてしる。
 - ・ 店を開くために必要な物の準備をすることができる。
 - ・ お店を開くことで、コミュニケーションやマナーについて理解する。

ウ 本実践のキャリア教育の視点

本単元は、商店の種類について調べる学習、売るものの準備や作成などの創作、地域の人と関わる基本的なコミュニケーションやマナーなど様々なことを学ぶことができる。

様々な商店があることを、地域の商店街のたんけんをすることで調べ、町の方々と触れ合いつつ自分のお店に必要なものを考えたり、教えてもらったりするなど、様々な体験を重ねることができる。また、気持ちのよい挨拶をしたり話を聞いたりする活動は、コミュニケーションの学習となり、その中で社会的なマナーや態度なども学ぶことができる。

準備の段階では、数を数えたり値段を考えたりする学習、招待状に書く言葉の学習など、教科の学習との関連を図りながら取り組むことができる。

お店に来てもらう喜びや、働くという模擬体験をすることができ、働く人々の生き方や仕事を理解することにつながる学習ができる。

エ 単元構想（全32時間）

| 次 | 学 習 内 容 | 配当計画時数 |
|---|--|--------|
| 1 | お店を探検しよう 町探検の計画をしよう（交流学級と合同） お店やさんを調べよう 町探検をしよう（交流学級と合同） 探検でわかったことやもっと知りたいことをまとめよう | 4 |
| 2 | 自分のお店を考えよう 何のお店をしたいかを考えよう 何を売ろうかな 育てた落花生で、クッキーを作ろう クッキー屋さんにしよう | 2 |
| 3 | お店の準備をしよう 落花生を育てて収穫をしよう（日常活動） クッキーの作り方を調べよう お店の看板を作ろう クッキーの材料を調べて買いに行こう お店やさんの仕事を知ろう 値段を決めよう 購入用のチケットを作ろう クッキーを作ろう | 14 |
| 4 | お店やさんに招待しよう 招待状を作ろう 落花生の紹介をしよう 店員さんのリハーサルをしよう | 6 |
| 5 | お店を開こう クッキー屋さんで買ってもらおう イートスペースで食べてもらおう | 2 |
| 6 | 振り返ろう 楽しかったことを発表しよう お礼のお手紙を書こう | 4 |

本単元は、前述の、キャリア発達についての視点のうち、②身の回りの事象への関心を高める、③自分の好きなことを見つけて伸び伸びと活動する。ということに重点を置いた構想となっている。

児童の発達段階から考慮すると、身の回りのこととしては広がりがあるが、地域との関わりの中で生きていくことは、特別支援学級の児童が将来も地元で成長するためには欠かせない大切な視点である。また、普段から地域の中に見守りの体制があることが、この学習には大きな利点となっている。

知的障害のある児童は、自信のなさもあり、周囲からの支援を受けることが多くなることから、次第に受動的になったり、自ら外に出て行き、様々な経験を積むことに消極的になったりすることも想定される。そのため、このように体験的な学習を積み重ね、「できた。」という成功体験を多く積ませることで自信をつけ、主体的に活動できる姿を目指す視点は欠かせないと考ええる。

児童の将来を見据え、障害特性や本人の得意を生かし、どのように自立と社会参加を促していくかということ、低学年の時から視野に入れ、系統立てた教育を行うことが大切である。そして、それは特別支援学級の担任、特別支援教育コーディネーター、交流学級の担任、保護者、関係機関等との共通理解のもと、個別の指導計画を立て、評価し再考するというプロセスを重ねる中でそれぞれが将来を描く重要性を認識することにつながると考える。

② 授業展開例 (14・15時間/全32時間)

| | 学習活動 | 指導上の留意点・評価 | 準備物 |
|--------|---|--|--|
| 導 入 | 1 出発の準備をする。 ・お買い物バッグ ・お買い物リスト ・お財布 | ・準備物を視覚的に提示することで、自分で準備が行えるようにする。 | ・準備物リスト |
| | クッキーの材料を買いに行き、お店やさんの仕事を知らう | | |
| | 2 町に出るときの約束を確認する。 ・右側を歩く ・先生と離れない ・お店では挨拶をする ・お礼を言う | ・公共の場でのマナーや挨拶、安全について、事前指導していたことを、ボードを見ながら再確認する。 | ・注意点をまとめたプリント |
| 展 開 | 3 お店に行き、買い物をする。 (食料品屋さん) ・小麦粉・バター ・砂糖 ・卵・紅茶パック (100円均一ショップ) ・ラッピング用の袋 ・リボン ・紙コップ、紙皿 ・紙ナプキン | ・お店で目移りするときには、買い物リストを見直すように言葉をかける。 ・売場がわからないときにはお店の人に尋ねるよう、指示する。 ・買い物リストを確認することで、買い忘れないか、確かめさせる。 ○ 計画していた買い物をすることができたか。 | ・買い物リスト ・セリフのメモ ・買い物バッグ ・買い物リスト |

| | | | |
|-----|--|--|-------------------|
| | 4 働いている人の姿を見学し、お店やさんにはどんな仕事があるのかを知る。 ・商品を準備して並べている ・レジではお金の受け渡しがある ・クッキーの種類や売り方 ・お店や売り場で服が違う | ・児童がお店やさんをするときにどんな準備があるかを問いかけることで、見る視点を与える。 ・考えてきた質問が思い出せるよう、メモを示す。 ・話をした後、お礼を言い忘れた場合には、声を掛ける。 ○ 働いている人にたずねたり、お礼を言ったりすることができたか。 | ・デジタルカメラ ・メモ用紙 |
| まとめ | 5 お礼を言って学校へ戻る。 6 次の予告を聞く。 | ・安全面に気をつけて帰るよう、再度安全面について確認をする。 ・次時の見通しがたち、不安なく取り組めるように予告しておく。 | ・注意点をまとめたプリント |

(4) 学校の特色に応じた単元構想

本単元は、商店街が近くにあり、商店の店主や従業員が小学校在籍児童の保護者であったり比較的學校へよく足を運んでくださる地域の方であったりと、協力を依頼しやすい関係性を基盤とした構想である。

第2学年の生活科では例年、町たんけんの学習をしており、当日は商店街の皆さんが児童のグループ活動を見守り、保護者も都合がつけばその時間帯に商店街に来て交通安全等を見守るような体制がとれている。交流学級の実施する町たんけんの時間を利用して、特別支援学級の児童も一緒に商店街に出かけることができる。グループの児童の発見や商店街の人との会話など、様々な発見や考えを共有することができ、交流学級の児童も、特別支援学級の児童の興味に触れたり、共に活動をしたりする中で学ぶことも多かった。

特別支援学級の生活単元学習として、国語科、算数科、生活科、道徳科、自立活動などを関連させながら単元を構成した。授業時数は32時間となり、ほぼ半年間をかけて学ぶ大単元となるが、その中に様々な活動や学習を網羅し、各教科と自立活動の目標及び内容を盛り込み、ダイナミックな活動を実践することができる。

校外学習を随時取り入れ、身近な環境の中で働く人と接し、経験を積むこともできる。知的障害のある児童の障害特性に合わせ、その都度目的や内容を焦点化して商店街に出かけることで、単元のねらいに迫ることができる。無論、何度も日々の業務の中時間をさいてくださる地域の方々の協力があり、実施ができていく内容である。

全ての学校が同様の単元構想ができるとは限らない。それぞれの地域に応じ、可能な活動を取り入れていくことが基本であり、その中で何を指すのかという単元のねらいを達成することができる構想をするということになる。

(5) 授業後の成果と課題

① 成果

対象児童にとり、校外に出かけて実際に体験をしたことが喜びとなり自信となった。実際に自分のお店を開く準備の段階でも、「お店」というものについてイメージを持ちやすかったようである。この活動全体を通し持ち続けたキャリア教育の視点により、様々な手立てを講じることができたと思われる。

児童は、興味のある物事には進んで取り組もうとする。クッキーのお店を開くことが決まってから、家庭の協力もあり、家でクッキーを買って食べたり一緒に作ったりしてきていた。また、お店の人に興味を持ち、店の人

の挨拶を真似てみたり、「算数セット」の中のお金を使って買い物ごっこをしたりする姿も見られていた。町たんけんで、いろいろな店を見たことや、店員から話を聞いたことなどが、普段の生活の遊びや学習に影響をしているようであった。そして、交流学級の児童と共に経験したことで、他の児童と共に遊ぶ姿も見られるようになった。

② 課題

この単元を進めるにあたっては、交流学級との連携、地域との連携は欠かせない。事前の計画と打ち合わせが必要である。単なる授業計画の共有ではなく、特別支援学級として何を目的としているのか、どのような姿を目指しているのかなどを共有してもらうことで、声かけや支援について具体性が出る。そのことを担任が念頭に置き、細かに伝え、十分な理解を図ることが望まれる。

また、地域との関連行事は従来から伝統的に行っている場合が多い。行事自体は同じものであっても、参加する児童に何を目的とさせるか、目指す児童の姿はどのようなものか、という教育的視点は時代とともに変化する。新しい観点としてキャリア教育を関連させる場合、従来の年間指導計画を見直し、観点を整理し、構想を明確にし、段階的、系統的な指導となるような計画を立てることが必要となる。

体験的な活動は、児童の意欲や主体性を伸ばすなど意義が大きい。特別支援学級の児童にとっては、つけたい力に直接つながる実際的な授業ともなる。学年に応じ、発達段階、縦と横のつながりを考慮した系統的な取り組みをすることで、定着、応用につなげることができると考える。

V 終わりに

特別支援学級の児童生徒は、その障害の程度により、交流及び共同学習として交流学級における授業を受けたり、個別の指導として特別支援学級で授業を受けたり柔軟な対応がしやすく、その時数や教科は個別に異なる。それは保護者や本人の願い、個々の障害の程度等、様々な状況を総合的に考慮した特別の教育課程を編成するためである。

一人一人のキャリア発達に応じた指導をするという視点は、従来の指導を今一度その観点を整理し、系統的に指導するということにつながる。系統立てた指導は、低学年のうちから将来を見据えた指導につながる。視点を明確にした指導により、児童の日々の学習や生活に気づきを促したり自己理解の基本的な部分に働きかけたりすることができる。発達段階に応じ、基礎的・汎用的能力をどのように定着させるかについて、計画を立て、実行し、評価をし、それによって修正を繰り返しながら実施していくことが大切である。

【引用文献】

- (1) 文部科学省 2018「特別支援教育資料（平成29年度）」第2部 データ編 p27-28
- (2) 文部科学省 2008「特別支援教育資料（平成19年度）」第1部 集計編 4 特別支援学級の状況
- (3) 文部科学省 2017「小学校学習指導要領（平成29年告示）」p18
- (4) 文部科学省 2011「小学校キャリア教育の手引き（改訂版）」第3章 p77-78
- (5) 文部科学省 2018「特別支援教育資料（平成29年度）」第1部 集計編 p23-24

【参考文献】

- (6) 文部科学省 2011「中学校キャリア教育の手引き」第1章
- (7) 関 理絵 2018「『準ずる教育』における児童のキャリア発達を促す支援についての一考察」－キャリア教育

と教科学習、自立活動を関連付けた実践を通して 児童の変容から－ 教育実践研究、28、p223-228